

大田区自立支援協議会 令和3・4年度 第7回地域生活部会議事録

文責：金子 正

(事務局一部修正)

(1) 会議の名称	大田区自立支援協議会 令和3・4年度 第7回地域生活部会			
(2) 開催日時	令和4年6月21日(火) 10:00~12:00			
(3) 開催場所	大田区立障がい者総合サポートセンター 5階 多目的室			
(4) 出席した委員、事務局	伊藤 朋春	山根 聖子	大場 貴弘	小野 英次郎
	金子 正	柴田 静	宮嶋 祐紀子	増井 優
	相澤 あゆみ	小松代 菜央	新田 美和	橋本 朋子
	平井 有希子			
	区事務局：土岐、西澤、親跡、木村			
(5) 内容・要旨	<p>1 事務連絡</p> <p>(1) 事務連絡</p> <p>1) 前回回収分意見カード内容確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発言時間に関しては、状況をみながら各自で判断を願う。 ・テーマについては協議検討するテーマが「地域生活」であるため、大田区全体を視ながら課題を抽出しているため、広く大きくなってしまふのは仕方なし。各回、協議をしていきながら様々な意見が出せるよう対応していく。 <p>2) 編集員の選出について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流会の開催時間に変更となった為、出席できる委員から事務局より選出していく。 <p>(2) 地域課題の検討(グループワーク)</p> <p>1) 幼少期・学齢期からの抽出課題(テーマ)について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門部会資料①②参照 <p>本人を中心として考えた時に、①安心して通える、使える社会資源が足りていない、医療的ケアに対応してくれる病院や強度行動障がいの方でも安心して通える病院、医療的ケアに対応できるショートステイ、利用したい時間にヘルパーがいないなど。②入所から戻るための仕組み(受け皿)がない、足りていない。一つの要因としては、社会資源の少なさ。</p> <p>→インフォーマルな支援の形成と充実を図ることで足りていない社会資源を補える。</p> <p>⇒本人を中心とした人のつながりをつくっていくためには「地域理解」が必要不可欠。→「地域理解」を促していくための手段・方法としての『理解啓発』について意見交換及び検討を行っていく(本日のテーマ)。</p> <p>2) 課題抽出までの経過</p> <p>理解啓発活動に関する事前アンケート参照。</p> <p>【追加内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心のバリアフリーすすめ隊のメンバーは親。ワークショップでは対象年齢等により説明の仕方を変えている。 ・サポートセンターB棟との意見交換会の実施。重度障がい方を対象とした訪問大学。 ・つばさ総合高等学校生徒によるインタビューを受ける。 ・低学年(1~3年生)は自己理解に重きをおき、小学4年生から他者理解に向けた学習。 			

- ・大田区肢体不自由児父母の会「案内」配布。理解を促す機会を設けて、外に向かっていく力も必要。
- ・サポートセンター：相談支援の取り組み（資料参照）。当事者を講師として迎えた講座。区内施設のパンやお弁当などの販売。高次脳機能障がいについてや、理学療法士による介助技術などの講習会の実施。中学生の職場体験授業の受け入れ。
- ・認知症疾患医療センターでは当事者向けの研修に力を入れていく予定。
- ・就労作業の中で食堂を運営。接客を通じて理解啓発活動に繋げている。町会の区報・回覧の配布作業。

3) 意見交換

A・Bの2グループに分かれて意見交換を実施。

Aグループ：事前アンケートを基に「対象」「内容」「頻度」にカテゴライズして、効果があること・足りていないことを抽出。

一般的に車椅子利用者は周囲の人からも「わかり（理解し）やすい」が知的障がいは「わかり（理解し）にくい」⇒「障がい」の区別を持っていない小学校低学年のうちから障がいのある人と色々なことを一緒に体験することで理解につながるのではないか。→長期的に見ていけば体験を通じて少しでも理解の芽が根付いていけば大人になった時、障がいのある人も受け入れられやすい社会になるかもしれない。

また、両親や祖父母の理解を促すことも重要。

大人になっても学生などは体験や学びの場を設けることで理解につながっていく。

Bグループ：実体験を基に抽出。

相手や障がいを「知らない」から「怖い」と感じる。

啓発も大事だが自ら発信していくことも大切。媒体としてヘルプマーク、車内広告（中吊り広告）、ラッピング車両、SNSなど。

親への教育も必要不可欠。「子を変える前に親が変わる」ための子育てに関する教育、学習、講座、情報提供。母親学級への情報提供。

相手のことを理解するために一緒に過ごす時間（時間共有）が非常に有効。学校の総合学習（障がいのある人との交流）は単発で終わってしまい、継続性がないことも現状の課題。

個人に対する発信・理解と社会への発信も課題。発信する切り口は「障がい」にこだわらず、子育てや差別解消法などからのアプローチでもいいのではないか。

次回部会の内容については作業部会で検討する。

以上